市長メッセージ 119

尾崎紅葉生誕150周年記念

熱海市長　齊藤　栄

さる1月17日、尾崎紅葉先生の生誕150周年記念式典が起雲閣で行われました。先生のご遺族のご出席のもと、熱海芸妓による「金色夜叉」貫一とお宮の別れの場面の寸劇、そして熱海出身の女優二宮さよ子さんと有志の皆さんによる別れのシーンの群読が披露され、それぞれが格調高く、大きな感動を呼んでいました。

先生は明治30年から35年にかけて「金色夜叉」を新聞に連載しました。この物語に出てくる熱海海岸での二人の別れの場面が大きな話題となり、熱海の名が全国に知られることになったのです。

当時の時代背景として、明治21年に今の熱海市役所の敷地内に御用邸がつくられ、また、この頃から政治家、実業家、文人墨客といったいわばセレブがこぞって熱海に別荘を持ち始めたことがあげられます。さらに明治29年に熱海・小田原間で人車鉄道（人力で動かす鉄道）が開通し、熱海の鉄道網が整備され始めました。

金色夜叉の連載が開始してから、約120年の月日が流れました。現在、街中には多くの旅館・ホテルが立ち並び、熱海駅には新幹線が通り、近代的な駅ビルが完成しました。もし、尾崎紅葉先生が今日の熱海を見たらどう感じるのでしょうか？「温泉観光地として大きく発展した」と喜ばれるのか、それとも「かつての街の落ち着きや趣きを忘れないでほしい」と思われるのか、記念式典を終え、私はそんなことを考えました。

広報あたみ2018．2月号掲載

市長メッセージ 120

梅サミットinみなべ町

熱海市長　齊藤　栄

「第23回全国梅サミット」が、2月に和歌山県みなべ町で行われました。ちなみに、みなべ町は南高梅の梅干しの産地として大変有名です。

全国梅サミットは平成8年に熱海市で初めて開催され、現在13市町が加盟しています。私が市長に就任して最初に参加したのが平成19年のみなべ町でのサミットでしたが、その後のみなべ町の取り組みには大きなものがありました。その一つは、梅の効能についての研究です。梅干しは体に良いということが言われますが、胃がん、糖尿病、そしてダイエットにも効果があることが県立医科大学の先生から報告されました。このような梅の効能を明らかにすることにより、梅の消費増につなげようとしています。

一方、熱海市の取り組みにも大きなものがあります。それは平成19年から3年間にわたる梅園のリニューアル事業です。当時の梅園は老木化が進み、かつての華やかさに欠けていました。その後、糸川のあたみ桜の整備も行い、街中の飲食店に梅園の観光客が流れるようさまざまな取り組みをしました。私はこのサミットで、今では梅やあたみ桜の開花の時期には、多くの来遊客に市内を回遊いただけるようになったことを発言しました。

10年ほど前と変わらない点もあります。前回そして今回も、みなべ町の地元の皆さんが梅を使った手作りの料理で我々をもてなしてくれました。「前回、齊藤市長さんと一緒に写真を撮りました」と私を覚えていてくれた地元の方が声をかけてくれました。本当に嬉しかったです。

広報あたみ2018．3月号掲載

市長メッセージ 121

平成30年度がスタートしました！

熱海市長　齊藤　栄

今、熱海は年間の宿泊客数が３年連続で３００万人を超え、「熱海のＶ字回復」ということが言われるようになりました。しかし、これは宿泊客数が10数年前の水準に戻ったに過ぎず、温泉、風光明媚な自然環境、首都圏からの近さなど、熱海の大きな潜在力を考えれば、本格的な熱海の新生は緒に就いたばかりと捉えています。今後２０２０年の東京五輪を一里塚として、さらに誘客につなげ来遊客の満足度向上などに力を入れていかなければなりません。

また、平成30年度は、「住まうまち熱海づくり」を加速するため、子育て、教育、市民インフラ(施設)の整備に多額の予算を充てています。私は今、熱海市の人口減少、特に若年層の市外への流出に大きな危機感を持っています。これらの事業は、熱海市が今後持続的に発展するために必要不可欠な未来への投資であり、これまで10年間で約36億円ほどを新たに積み立ててきた基金(市の貯金)を活用して、ようやく実現できるようになったものです。

今後とも人口が減り、税収が減っていくことが確実な中で、基礎自治体が生き残っていくことは容易なことではありません。しかし、地域資源に恵まれた熱海市は、全国の再生モデルになる大きな可能性を持っています。「10年後20年後の熱海のさらなる発展の礎づくり」を行うことを目標に、平成30年度も全力で頑張ってまいります。

広報あたみ2018．4月号掲載

市長メッセージ 122

初の国際映画祭！

熱海市長　齊藤　栄

「熱海には映画館もないのに、なぜ映画祭を開催するの？」そんな意見を持つ市民の方がいるかもしれません。今回の熱海国際映画祭の開催は、「熱海を日本のハリウッドにしたい」という思いから出発しています。

この思いは、平成24年に職員の発案によるロケ支援事業「ADさん、いらっしゃい！」を始めた時から持っているものです。自然景観に恵まれ、温泉観光地である熱海は、映画やドラマを撮影するにふさわしいロケ地が街中に詰まっています。いつも市内のどこかで撮影が行われている光景は、アメリカ映画産業の中心地「ハリウッド」そのものです。この事業を開始してからの6年間で、ロケ支援のノウハウをしっかりと蓄えてきました。

そして次の段階として熱海国際映画祭を開催します。この映画祭の中心的事業は、商業上映の決まっていない映画の国際コンペです。最優秀作品には東京、大阪、名古屋での上映が約束されます。まさに、日本そして世界から新しい才能が発掘される機会となります。私はこの映画祭を通して、今後、新人監督などが熱海をロケ地に選んでくれることを期待しています。

「ADさん、いらっしゃい！」を始めた頃、「熱海を日本のハリウッドに」は、夢物語に聞こえたかもしれません。しかし、今少しずつ熱海が注目されている中で、この映画祭の開催は夢の実現に向けた大きな一歩になると考えています。

広報あたみ2018．5月号掲載

市長メッセージ 123

シニアは人生の上級者

熱海市長　齊藤　栄

一般的に65歳以上の方を「高齢者」と呼びますが、私は「シニア」と呼ぶこともあります。シニアは上級という意味で、多くの人生経験を積まれた人生の上級者の意味合いです。そして、シニアの皆様の状況は必ずしも年齢によらず人それぞれです。

現在、介護サービスを使われる方は約2千人であり、シニア世代の約1割です。残りの約9割の方は元気な方々であり、この元気な生活をこれからも長く送っていただくために、市役所などが健康寿命を延ばすための教室、地域サロンの充実、1人暮らし緊急連絡サービスなどを行っています。

また、昨年、市内を7地区に分け、342世帯に行った「熱海市いきいき活動調査」によれば、交通や地形などの条件により、地域によってシニアの皆様のお困りごとなどが大きく異なることが分かりました。シニアの皆様の生活満足度を高めていくためには、各地域の特性を踏まえた施策を実施しなければなりません。

今後、高齢化が進んでいく中で、シニアの皆様が置かれた状況や各地域の特性をこまやかに捉えながら、施策の充実を図ってまいります。シニアの皆様におかれましては、ご自身の熱海の暮らしを楽しんでいただくとともに、これまで積まれた人生のご経験を、地域への貢献という形でも生かしていただければ幸いです。

広報あたみ2018．6月号掲載

市長メッセージ 124

子育てしやすいまちに！

熱海市長　齊藤　栄

長浜海浜公園内の大型複合遊具が人気です！この遊具は昨年の3月に完成したものですが、「子供たちの遊ぶ所を作って欲しい」という声に応えて、子供たちにも、ご家族にも喜んでもらえるものをという強い思いがありました。

先日、この遊具を親子三代で楽しんでいるご家族に話しかけたところ、南熱海出身で現在結婚して沼津に住んでいるお母さんが、その日はお子さんを連れ実家のご両親を訪ねたとのことでした。この例のように、最近は市内だけでなく近隣市町からも、この遊具を目的に来ていただいているようです。

3年ほど前から「住まうまち熱海づくり」の大きな柱として、子育て支援のための事業を強力に進めています。長浜海浜公園をはじめ、渚小公園や泉公園の遊具の設置、療育教室「ＩＰＰＯあじろ園」、産前産後の総合相談窓口「すくすく」、不妊・不育治療費の助成などです。

私は熱海の人口減少、特に働き世代の人口減少に大きな危機感を持っています。働き世代が少なくなれば、税収も減り、高齢者の皆様を支える人が少なくなります。このため、働き世代に対して、働く場所を確保することが大前提ですが、それに加えて、熱海市が子育てしやすいまちになることが必須条件であると考えています。今後とも、認定こども園や児童発達支援センターの新設などを通して、子育て支援に対してさらに力を入れてまいります。

広報あたみ2018．7月号掲載

市長メッセージ 125

市民インフラの整備

熱海市長　齊藤　栄

築52年、老朽化の進んだ南熱海支所・消防署南熱海出張所の改築準備が始まっています。この事業を含めて、市民の皆様の暮らしを支える公共施設（インフラ）の整備を可能にするために最も大切なことは計画性と財源の確保です。

今後、人口減少や市税の減収が予想される中で、新規プロジェクトとあわせて、厳しいことではありますが、既存の施設の統合や縮小も進めていく必要があります。市では公共施設整備の長期計画を作り、計画的に改築や修繕などを進めています。

悩ましいのは財源の確保です。家計と同様に、無駄を省いて貯金をする地道な取り組みが必須です。何もしなければお金は貯まるという方がいますが、税収が減少している中でそれほど簡単な話ではありません。市は平成19年から23年までの5年間に集中的に行財政改革を実施。職員を１０４人（16・８％）減らし、市役所のすべての事業を見直し、また水道料金なども値上げして、新市庁舎や新生熱海中学校をようやく作ることができました。その後も引き続き行革を進め、10年間で公営企業会計の41億円の不良債務を全額解消。同時に36億円の貯金を作り、この貯金で南熱海支所や認定こども園などに着手できたのです。

行財政改革は現状の負担の分担を見直すもので、率直に言って不人気な取り組みです。しかしながら、熱海の未来を切り開くために、避けては通れない取り組みと信じています。

広報あたみ2018．8月号掲載

市長メッセージ 126

4期目を迎えて

熱海市長　齊藤　栄

先の市長選挙で、再び市長職を担うこととなりました。今後とも初心を忘れず、市政に取り組んでまいります。

スタート早々、嬉しいニュースがあります。熱海市が「観光庁長官表彰」を受賞しました。観光振興・地域の活性化に貢献した団体などに国から贈られるもので、市のこれまでの取り組みが認められたことは大変喜ばしいことです。

一方で、熱海市には観光分野に限らず、多くの課題が残されています。今の好況を一時のブームとするのでなく、勢いがある今こそ、10年後、20年後、それ以降も、熱海が発展し続ける仕組みを作る必要があります。このことを実現させる政策が「熱海２０３０ビジョン」です。

このビジョンは中長期的な目標です。現在小学生の子ども達が成人して社会に出る、２０３０年に熱海はこうありたいという大きな方針を「観光・経済」「教育・福祉」「仕事・くらし」のそれぞれの分野について示しています。このビジョンに基づいて、今何をなすべきかという視点で実直に歩みを進めて行きます。

熱海の来遊客数は、高度経済成長期の昭和40年頃をピークに、バブル景気の一時期を除き、約50年間に渡って一貫して減少してきました。しかしながら、今この状況がようやく変わり始めています。「回復」しつつある熱海を、今後は「躍進」させるための礎を築くべく、市民の皆様と共にこの４年間さらに頑張ってまいります。

広報あたみ2018．11月号掲載

市長メッセージ 127

この一年を振り返って

熱海市長　齊藤　栄

今年は、台風12号の大きな影響がホテルや港湾施設を中心にありましたが、総じて観光地としては賑わいと明るい話題が多い年でした。

伊豆半島の世界ジオパーク認定、静岡デスティネーションキャンペーンの開始など、これまで数年間にわたって仕込んできた大型プロジェクトが動き始めました。熱海を含む伊豆半島、そして静岡県にとってその魅力をPRする絶好の機会がやってきました。加えて、今熱海では新たなホテルの建設や、飲食店の出店が目に付くようになりました。さらなる賑わいと来遊客の満足度を上げる民間投資は、まちの発展にとって大変ありがたいことです。

一方で、今年は市民インフラの整備が進んだ年でもあります。老朽化の進んでいた西部地区と初島地区の消防団詰所がどちらも移転新築されました。既に地域の安全安心の拠点として、消防団の皆さんに有効に活用いただいています。また、築52年を経た「南熱海支所・消防署南熱海出張所」の改築、そして第二小学校を活用した「認定こども園」の工事も始まりました。駐車場やエレベーターが整備された南熱海の行政拠点、そして幼稚園と保育園の両方の利点を持った新たな子育て拠点に生まれ変わります。

経済の持続的発展と豊かな市民の暮らしを実現できる温泉観光地のモデルをつくるため、「熱海２０３０ビジョン」に掲げた目標に向け着実に進んでまいります。

広報あたみ2018．12月号掲載